

さまよえる猶太人

芥川龍之介

青空文庫

キリスト
 基督教国にはどこにでも、「さまよえる猶太人」の伝説が残っている。伊太利でも、
 フランス、イギリス、ドイツ、オウスタリ、スペイン、
 仏蘭西でも、英吉利でも、独逸でも、墺太利でも、西班牙でも、この口碑が伝わって
 ない国は、ほとんど一つもない。従つて、古来これを題材にした、芸術上の作品も、沢山
 ある。グスタヴ・ドオレの画は勿論、ユウジアン・スウもドクタア・クロリイも、これ
 小説にした。モンク・ルイズのあの名高い小説の中にも、ルシファや「血をしたたらす尼
 と共に「さまよえる猶太人」が出て来たように記憶する。最近では、フィオナ・マクレオ
 ドと称したウイリアム・シヤアプが、これを材料にして、何とか云う短篇を書いた。

では「さまよえる猶太人」とは何かと云うと、これはイエス・クリストの呪を負つて、
 最後の審判の来る日を待ちながら、永久に漂浪を続けている猶太人の事である。名は記録
 によつて一定しない。あるいはカルタフィルスと云い、あるいはアハスフェルスと云い、
 あるいはブタデウスと云い、あるいはまたイサク・ラクエデムと云っている。その上、職
 業もやはり、記録によつてちがう。イエルサレムにあるサンヘドリムの門番だったと云う
 ものもあれば、いやピラトの下役だったと云うものもある。中にはまた、靴屋だと云つ
 ているものもあつた。が、呪を負うようになった原因については、大体どの記録も変りは

ない。彼は、ゴルゴタへひかれて行く Kristus が、彼の家の戸口に立止って、暫く息を入れようとした時、無情にも罵詈ばりを浴せかけた上で、散々打ちややく擲ちやくを加えさせした。その時負うたのが、「行けと云うなら、行かぬでもないが、その代り、その方はわしの帰るまで、待つて居れよ」と云う呪である。彼はこの後のち、パウロが洗礼を受けたのと同じアニアスの洗礼を受けて、ヨセフと云う名を貰った。が、一度負った呪は、世界滅却の日が来るまで、解かれない。現に彼が、千七百二十一年六月二十二日、ムウニツヒの市まちに現れた事は、ホオルマイエルのタツシエン・ブウフの中に書いてある。――

これは近頃の事であるが、遠く文献さかのほを溯つても、彼に関する記録は、随所に発見される。その中で、最も古いのは、恐らくマシウ・パリスの編纂したセント・アルバンスの修道院の年代記に出ている記事であろう。これによると、大アルメニアの大僧正が、セント・アルバンスを訪れた時に、通訳の騎士ナイトが大僧正はアルメニアで屢々しばしば「さまよえる猶太人」と食卓を共にした事があると云ったそうである。次いでは、フランドルの歴史家、フィリップ・ムスクが千二百四十二年に書いた、韻文いんぶんの年代記の中にも、同じような記事が見えている。だから十三世紀以前には、少くとも人の視聴そばだを聳たしめる程度に、彼は欧羅巴ヨオロッパの地をさまよわなかつたらしい。所が、千五百五年になると、ボヘミアで、ココトと

云う機織^{はたお}りが、六十年以前にその祖父の埋めた財宝を彼の助けを借りて、発掘する事が出来た。そればかりではない。千五百四十七年には、シュレスウイツヒの僧正パウ・フォン・アイツェンと云う男が、ハムブルグの教会で彼が祈禱^{わたく}をしているのに出遇った。それ以来、十八世紀の初期に至るまで、彼が南北両欧に亘^{わた}つて、姿を現したと云う記録は、甚だ多い。最も明白な場合のみを挙げて見ても、千五百七十五年には、マドリッドに現れ、千五百九十九年には、ウインに現れ、千六百一年にはリウベック、レヴェル、クラカウの三ヶ所に現れた。ルドルフ・ボトレウスによれば、千六百四年頃には、パリに現れた事もあるらしい。それから、ナウムブルグやブラツセルを経て、ライプツィヒを訪れ、千六百五十八年には、スタンフォードのサムエル・ウオリスと云う肺病やみの男に、赤サルビアの葉を二枚に、^{ブラッドワート}羊 蹄^{ヒール}の葉を一枚、麦酒にまぜて飲むと、健康を恢復すると云う秘法を教えてやったそうである。次いで、前に云つたムウニツヒを過ぎて、再び英吉利^{イギリス}に入り、ケムブリッジやオックスフォードの教授たちの質疑に答えた後、^{デンマアク}丁 抹^{スウェデン}から 瑞 典^{スウェデン}へ行つて、ついに踪跡^{そうせき}がわからなくなつてしまった。爾来、今日まで彼の消息は、杳^{よう}としてわからない。

「さまよえる猶太人」とは如何なるものか、彼は過去において、如何なる歴史を持っている

るか、こう云う点に関しては、如^{によしよう}上で、その大略を明にし得た事と思う。が、それを伝えるのみが、決して自分の目的ではない。自分は、この伝説的な人物に関して、嘗^{かつ}て自分が懐^{いだ}いていた二つの疑問を挙げ、その疑問が先頃偶然自分の手で発見された古文書^{こもんじよ}によつて、二つながら解決された事を公表したのである。そうして、その古文書の内容をも併せて、ここに公表したのである。まず、第一に自分の懐^{いだ}いていた、二つの疑問とは何であるか。――

第一の疑問は、全く事実上の問題である。「さまよえる猶太人」は、ほとんどあらゆる^{キリスト}基督教国に、姿を現した。それなら、彼は日本にも渡来した事がありはしないか。現代の日本は暫く措^おいても、十四世紀の後半において、日本の西南部は、大抵^{てんしゆきよう}天主教を奉じていた。デルブロオのビブリオテク・オリアンタルを見ると、「さまよえる猶太人」は、十六世紀の初期に当つて、ファデイラの率いるアラビアの騎兵が、エルヴァンの市^{まち}を陥れた時に、その陣中に現れて、Allah akubar（神は大いなるかな）の祈祷を、ファデイラと共にしたと云う事が書いてある。すでに彼は、「東方」にさえ、その足跡を止めてゐる。大名と呼ばれた封建時代の貴族たちが、黄金の十字架^{くるす}を胸に懸けて、パアテル・ノステルを口にした日本を、――貴族の夫人たちが、珊瑚^{さんご}の念珠^{ねんじゆ}を爪繰^{つまぐ}つて、毘留^{びる}善麻利耶^{ぜんまりあ}

の前に跪ひざまずいた日本を、その彼が訪れなかつたと云う筈はない。更に平凡な云い方をすれば、当時の日本人にも、すでに彼に関する伝説が、「ぎやまん」や羅面琴らべいかと同じように、輸入されていはしなかつたか——と、こう自分は疑つたのである。

第二の疑問は、第一の疑問に比べると、いささかその趣を異にしている。「さまよえる猶太人」は、イエス・クリストに非礼を行つたために、永久に地上をさまよわなければならぬ運命を背負わせられた。が、クリストが十字架くるすにかけられた時に、彼を窘くろしめたものは、独りこの猶太人ばかりではない。あるものは、彼に荆棘いばらの冠かんむりを頂ただかせた。あるものは、彼に紫ころもの衣まとを纏まとわせた。またあるものはその十字架くるすの上に、I・N・R・Iの札をうちつけた。石を投げ、唾つばを吐きかけたものに至つては、恐らく数えきれないほど多かつたのに違ちがひない。それが何故、彼ひとりクリストの呪のろいを負つたのであろう。あるいはこの「何故」には、どう云う解釈が与えられているのであろう。——これが、自分の第二の疑問であつた。

自分は、数年来この二つの疑問に対して、何等の手がかりをも得ずに、空しく東西この古文書もんじよを渉しょうりよう猟りようしていた。が、「さまよえる猶太人」を取扱つた文献の数は、非常に多い。自分がそれをことごとく読破すると云う事は、少くとも日本にいる限り、全く不可能

な事である。そこで、自分はとうとう、この疑問も結局答えられる事がないのかと云う気になった。所が丁度そう云う絶望に陥りかかった去年の秋の事である。自分は最後の試みとして、りようひ両肥及び平戸あまくさ天草の諸島を遍歴して、古文書の蒐集に従事した結果、偶然手に入れた文ぶんろく禄年間の MSS. 中から、ついに「さまよえる猶太人」に関する伝説を発見する事が出来た。その古文書の鑑定その他に関しては、今ここに叙じよせつ説している暇いとまがない。ただそれは、当時の天主教徒の一人が伝聞した所を、そのまま当時の口語で書き留めて置いた簡単な覚え書だと云う事を書いてさえ置けば十分である。

この覚え書によると、「さまよえる猶太人」は、平戸ひらとから九州の本土へ渡る船の中で、フランシス・ザヴィエルと邂かいこう逅した。その時、ザヴィエルは、「シメオン伊留満いるまん一人を御おしと伴に召され」ていたが、そのシメオンの口から、当時の容ようす子が信徒の間へ伝えられ、それがまた次第に諸方へひろまって、ついには何十年か後に、この記録の筆者の耳へもはいるような事になったのである。もし筆者の言をそのまま信用すれば「ふらんしす 上しやうにん人さまよえるゆだやび」と問答の事」は、当時の天主教徒間に有名な物語の一つとして、しばしば説教の材料にもなったらしい。自分は、今この覚え書の内容を大体わたに亘わたって、紹介すると共に、二三、原文を引用して、上記の疑問の氷解した喜びを、読者とひとしく味わ

たいと思う。――

第一に、記録はその船が「土産みやげの果物くだものくさぐさを積たくわんでいた事を語っている。だから季節は恐らく秋であろう。これは、後段に、無花果いちじゆく云々の記事が見えるのに徴しても明である。それから乗合はほかにはなかったらしい。時刻は、丁度昼であつた。――筆者は本文へはいる前に、これだけの事を書いている。従つてもし読者が当時の状況を彷彿ほうふつしようと思うなら、記録に残っている、これだけの箇条から、魚の鱗うろこのように眩まばゆく日の光を照り返している海面と、船に積んだ無花果いちじゆくや柘榴ざくろの実と、そうしてその中に坐りながら、熱心に話し合っている三人の紅毛人こうもうじんとを、読者自身の想像に描いて見るよりほかはない。何故と云えば、それらを活いきいき々と描写する事は、単なる一学究たる自分にとつて、到底不可能な事だからである。

が、もし読者がそれに多少の困難を感じるとすれば、ペックがその著「ヒストリイ・オブ・スタンフォード」の中で書いている「さまよえる猶太人」の服装を、大体ここに紹介するのも、読者の想像を助ける上において、あるいは幾分の効果があるかも知れない。ペックはこう云っている。「彼の上衣うわぎは紫である。そうして腰まで、ボタンがかかっている。ズボンも同じ色で、やはり見た所古くはないらしい。靴下はまっ白であるが、リンネルか、

毛織りか、見当がつかなかった。それから髻ひげも髪も、両方とも白い。手には白い杖を持つていた。「——これは、前に書いた肺病やみのサムエル・ウォリスが、親しく目撃した所を、ペックが記録して置いたのである。だから、フランシス・ザヴィエルが遇あつた時も、彼は恐らくこれに類した服装をしていたのに違いない。

そこで、それがどうして、「さまよえる猶太人」だとわかったかと云うと、「上しょうにん人
の祈祷された時、その和郎わろうも恭しく祈祷した」ので、フランシスの方から話をしかけたのだそうである。所が、話して見ると、どうも普通の人間ではない。話すことと云い、話し振りおのずかと云い、その頃東洋へ浮浪して来た冒険家や旅行者とは、自ら容ようす子がちがつている。「天竺てんじく南蛮なんばんの今こんじやく昔たなごころを、掌ゆびさにても指すように」指さしたので、「シメオン伊留満いるまんはもとより、上しょうにん人 御自身おんみづさえ舌を捲かれたそうでござる。」そこで、「そなたは何処のものじやと御訊おたずねあつたれば、一いっしよ所ふじゆう不住じゆうのゆだやびと」と答えた。が、上人も始めは多少、この男の真偽を疑いかけていたのであろう。「当来はらいの波羅韋僧ばらいそうにかけても、誓い申すべきや。」と云つたら、相手が「誓い申すとの事故、それより上人も打ちつけて、種々くさくさ問答せられたげじや。」と書いてあるが、その問答を見ると、最初の部分は、ただ昔あつた事実を尋ねただけで、宗教上の問題には、ほとんど一つも触れていない。

それがウルスラ上人と一万一千の童貞少女が、「奉公の死」を遂げた話や、パトリック上人の浄罪界の話を経て、次第に今日の使徒行伝中の話となり、進んでは、ついに御主耶蘇基督が、ゴルゴダで十字架を負った時の話になった。丁度この話へ移る前に、上人が積荷の無花果を水夫に分けて貰って、「さまよえる猶太人」と一しよに、食つたと云う記事がある。前に季節の事に言及した時に引いたから、ここに書いて置くが、勿論大した意味がある訳ではない。——さて、その問答を見ると、大体下のような具合である。

上人「御主御受難の砌は、エルサレムにいられたか。」

「さまよえる猶太人」「如何にも、眼のあたりに御受難の御有様を拝しました。元来それがしは、よせふと申して、えるされむに住む靴匠でござったが、当日は御主がぴらと殿の裁判を受けられるとすぐに、一家のものどもを戸口へ呼び集めて、勿体なくも、御主の御悩みを、笑い興じながら、見物したものでござる。」

記録の語る所によると、クリストは、「物に狂うたような群集の中を」、パリサイの徒と祭司とに守られながら、十字架を背にした百姓の後について、よろめき、歩いて来た。肩には、紫の衣がかかっている。額には荆棘の冠がのつている。そうしてまた、手や足に

は、鞭むちの痕あとや切り創きずが、薔薇ばらの花のように赤く残っている。が、眼めだけは、ふだんと少しも変りがない。「日頃のように青く澄んだ御眼おんめ」は、悲しみも悦びも超越した、不思議な表情を湛たえている。——これは、「ナザレの木匠もくしょうの子」の教を信じない、ヨセフの心にさえ異常な印象を与えた。彼の言葉を借りれば、「それがしも、その頃やはり御主おんあるじの眼を見る度に、何となくなつかしい気が起ったものでござる。大方おおかた死んだ兄と、ように似た眼をしていられたせいでもござろう。」

その中うちにクリストは、埃と汗とにまみれながら、折から通りかかった彼の戸口に足を止とどめて、暫く息を休めようとした。そこには、鞞なめしがわ皮かわの帯をしめて、わざと爪を長くしたパリサイの徒もいた事であろうし、髪に青い粉をつけて、ナルドの油の匂をさせた娼婦たてたちもいた事であろう。あるいはまた、羅馬ロオマの兵卒たちの持っている楯たてが、右からも左からも、眩まぼゆく暑い日の光を照りかえしていたかも知れない。が、記録にはただ、「多くの人々と書いてある。そうして、ヨセフは、その「多くの人々の手前、祭司たちへの忠義ぶりが見せとうござつたによつて、「クリストの足を止めたのを見ると、片手に子供を抱いだきながら、片手に「人の子」の肩を捕とらえて、ことさらに荒々しくこずきまわした。——「やがては、ゆるりと磔はりき柱ばしらにかつて、休まる体からだじやなど悪あつこう口くちし、あまつさえ手をあげて、打ちよう

擲ちやくさえしたものでござる。」

すると、クリストは、静に頭をあげて、叱るようにヨセフを見た。彼が死んだ兄に似ていると思つた眼で、嚴おそにじつと見たのである。「行けと云うなら、行かぬでもないが、その代り、その方はわしの帰るまで、待つて居れよ。」——クリストの眼を見ると共に、彼はこう云う語ことばが、熱風よりもはげしく、刹那に彼の心へ焼けつくような気もちがした。クリストが、實際こう云つたかどうか、それは彼自身にも、はつきりわからない。が、ヨセフは、「この呪のろいが心耳しんじにとどまつて、いても立つても居られぬような氣に」なつたのである。あげた手が自ら垂れ、心頭にあつた憎しみが自ら消えると、彼は、子供を抱いたまま、思わず往来ひさまずに跪ひざまずいて、爪を剥はがしているクリストの足に、恐る恐る唇をふれようとした。が、もう遅い。クリストは、兵卒たちに追い立てられて、すでに五六歩彼の戸口を離れている。ヨセフは、茫然として、ややともすると群集にまぎれようとする。御おん主あるじの紫の衣を見送つた。そうして、それと共に、云いようなない後悔の念が、心の底から動いて来るのを意識した。しかし、誰一人彼に同情してくれるものはない。彼の妻や子でさえも、彼のこの所作しよさくを、やはり荆棘いばらの冠をかぶらせるのと同様、クリストに対する嘲ちやうろう弄ろうだど解釈した。そして往来の人々が、いよいよ面白そうに笑い興じたのは、無理もない話であ

る。——石をも焦がすようなエルサレムの日の光の中に、濛々と立騰る砂塵をあげせて、ヨセフは眼に涙を浮べながら、腕の子供をいつか妻に抱きとられてしまったのも忘れて、いつまでも跪いたまま、動かなかつた。……「されば恐らく、えるされむは広しと云え、おんあるじはすかし御主を辱めた罪を知っているものは、それがしひとりでござろう。罪を知らばこそ、呪もかかったのでござる。罪を罪とも思わぬものに、天の罰が下ろうようはござらぬ。云わば、御主を磔柱はりきにかけた罪は、それがしひとりが負うたようなものでござる。但し罰をうければこそ、あがな贖いもあると云う次第ゆえ、やがて御主の救きゆうばつ拔を蒙るのも、それがしひとりにきわまりました。罪を罪と知るものには、総じて罰と贖あがないとが、ひとつに天から下るものでござる。」——「さまよえる猶太人」は、記録の最後で、こう自分の第二の疑問に答えている。この答の当否を穿鑿せんさくする必要は、暫くない。ともかくも答を得たと云う事が、それだけですでに自分を満足させてくれるからである。

「さまよえる猶太人」に関して、自分の疑問に対する答を、東西の古文書の中に発見した人があれば、自分は切せつに、その人が自分のために高教を吝おしまない事を希望する。また自分としても、如上の記述に関する引用書目を挙げて、いささかこの小論文の体裁を完全にしたいのであるが、生憎あいにくそうするだけの余白が残っていない。自分はただここに、「さ

まよえる猶太人」の伝記の起源が、馬太伝またいでんの第十六章二十八節と馬可伝まこでんの第九章一節とにあると云うベリリンググツドの説を挙げて、一先ずペンを止める事にしようと思う。

(大正六年五月十日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年9月24日第1刷発行

1995（平成7）年10月5日第13刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：j.utyama

校正：earthian

1998年11月11日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

さまよえる猶太人

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>